

ちよつと
ひといき...

茶ぐわくゆんたく

146



空からみる私たちの宜野湾②

上の写真は、東京でオリンピックのあった頃の宜野湾市です。広大な普天間飛行場とキャンプ瑞慶覧があり、飛行場左側（西海岸側）の軍用道路1号線（現国道58号）沿いに、住宅が建ち並び、開発が進んでいるのがよく分かります。また真志喜にはキャンプ・マーシー、宇地泊にもキャンプ・ブーンのみ軍



今から52年前の宜野湾市【東京オリンピックのあった1964(昭和39)年に撮影】軍用道路1号線沿いの白い建物は、ほぼコンクリート住宅で、上大謝名や嘉数ハイツに外人住宅地が見られます。

施設が見えます。対して、飛行場右側（内陸側）は、開発が進んでいない事が分かります。我如古、嘉数などの集落があり、戦前の原風景がそこかしこに見られたことでしょう。

下の写真では、市全域に普天間飛行場を囲むように市街地化が進み、西海岸が埋め立てられコンベンションセンターやホテルが建ち並んでいます。真志喜と宇地泊にあった米軍施設は返還されて商業地となっていますが、大山のタイモ畑は緑を残したままで、キャンプ瑞慶覧の一部は昨年返還されました。

2020(平成32)年には、二回目となる東京でのオリンピックがあります。その時、宜野湾市はどの様になっているのでしょうか。



上の写真から39年後の宜野湾市【2003(平成15)年に撮影】飛行場と大山を除いて市全域が建物で覆い尽くされています。西海岸が埋め立てられ市域の広がりがわかります。

はくぶつかんの部屋 ③2

イクサユー(戦世)を思う

71年前の6月、当時の宜野湾村には、村民の姿はなく、村民は村外の収容所に送られたり、南部戦線の戦場で北部の山の中を逃げまどっていたりしていました。村民のいなくなった村では、米軍がブルドーザーなどの重機で、普天間飛行場を建設中でした。

命をなからえた村民は、各地の収容所で不慣れた暮らしを送りながら、帰村を待ちわびていましたが、実現したのは翌年以降のことでした。そして、帰ってきた村民が目にしたのは、破壊しつくされた上に、村の中心部に巨大な飛行場が横たわる、変わり果てた故郷の姿でした。なにもかも失った焼け野原から、現在に至るまでの復興が、苦難の連続であったことは、いままでもありません。



米軍による普天間飛行場建設(沖縄県公文書館蔵)

※6月15日から、慰霊の日パネル展「沖縄戦の中の宜野湾」を開催します。イクサユー(戦世)を改めて見つめなおし、失ったものは何だったのか、考えるきっかけになればと思います。

【問合せ】市立博物館 ☎870-9317 入館料無料となっておりますので、お気軽にご来館ください。